

児童理解を基にした児童への指導・支援 － 不登校の予兆が見られる児童を中心とした不登校対策 －

提案者 佐野市立犬伏小学校 教諭 林 達也

I 主題設定の理由

これまで教員として、課題を抱える児童に、自分なりの信念をもって向き合ってきたが、児童がいつもと行動や態度が変わったり、休みがちになったりすることがあった。そんな時には、担任として自分一人で対応したり、独りよがりな感覚で児童に価値観を押し付けてしまったりしたことが原因の一つではないかと不安に思うこともあった。

一方、児童をほめる、認めるなどのかかわりをしたり、児童の課題の背景や要因について複数の教員で話し合い、それを基に支援を行ったりしたことで、児童が登校できるようになった経験もあった。

「生徒指導提要」(2022)では、不登校等の生徒指導上の諸課題に対して、課題の未然防止、早期発見、早期支援・対応等の一貫した支援を行っていくことが求められている。

本研究では、複数の教員により、不登校の予兆が見られる児童を様々な視点で理解し、それを基に適切な支援ができる方策について検討する必要があると考える。また、児童のことをほめたり、認めたりするなど、児童が「学校に行きたい」という思いにつながる取組も、不登校対策という視点から重要であると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 基本的な考え方

(1) 課題予防的生徒指導

児童は、原因が分からない体調不良を訴えたり、遅刻、早退が増えたりすることがある。不登校対策という視点から、教員はそのような児童のサインを捉え、早期に支援を行っていく必要がある。また、全ての児童が不登校になり得るという考えの基に、早期対応だけでなく、不登校につながる課題を未然に防止する取組も大切である。

「生徒指導提要」(2022)では、「生徒指導を課題性（高い・低い）と課題への対応の種類から分類すると、三類となる」と示されている。本研究では、その三類の一つである課題予防的生徒指導に焦点を当て、不登校の予兆が見られる児童を対象とした課題早期発見対応のみならず、全ての児童を対象とした課題未然防止教育にも重点をおくこととした。

(2) 「不登校の予兆」について

「欠席が気になる児童生徒への指導のヒント～不登校の初期対応～」(栃木県総合教育センター2018)に示されている「不登校のサインの例」などを基に、不登校の予兆を以下にまとめた(図1)。

・特定の曜日の欠席、理由のはっきりしない欠席が多くなる。 ・遅刻、早退が増える。	欠席等の状況
・頭痛、腹痛、体調不良などを訴える。 ・保健室を訪れることが多くなる。	行動、態度の変化
・忘れ物が多くなる。 ・教員を避ける。 ・学習意欲が低下する。	・休み時間など一人でいることが多くなる。 ・口数が少なくなる。 ・挨拶をしなくなる。 ・成績が落ちる。 ・宿題を出さなくなる。
・アンケートや日記で「学校に行きたくない」と書く。 ・面談での訴えがある。	相談、訴え

図1 不登校の予兆

(3) 児童理解を深めるために

「児童生徒への適切な指導のために～子どもの理解を深める～」(栃木県総合教育センター2020)によると、児童の課題の背景・要因を考える際には、「～なのではないか」と想像することが大切であると示されている。不登校の予兆が見られる児童についての情報を共有し、課題の背景や要因、児童の思いや願いなどを複数の教員により考えることで、それらを基に適切な支援を行うことが必要である。

2 研究の方法

(1) アンケート調査(教員、児童)

まず、A小学校の教員25名を対象とし、児童を理解する上での傾向や課題、不登校の予兆が見られる児童のイメージ等を調査することとした。

次に、不登校の予兆が見られる児童への早期支援という視点から、第1学年3学級93名に調査を行った。「学校に行きたくないことがあるか」「どのような学校になれば行きたくなくなるか」などの質問をし、不登校の予兆が見られる児童への支援を検討する際の手掛かりとした。

(2) 学年会における取組

学年会は、教員同士が定期的に児童の情報を共有したり、支援策を検討したりする場として活用することができる。そこで、不登校の予兆が見られる児童の背景や要因、児童の思いや願いなどについて「～なのではないか」の視点で考えを出し合い、それらを基にして支援策を考えられるよう提案した。

(3) 児童の好きなこと、得意なことなどを認める場の検討

これまでの経験において、児童のことをほめたり、認めたりしたことで児童が登校できるようになったことから、好きなことや得意なことなどについて、教員や友達など他者から認められる場を設定し、承認される機会を増やすことにより、児童が学校に行きたいという思いになるか検証することとした。

3 研究の実際

(1) アンケート結果から

ア 教員へのアンケート結果と手立て

「児童理解をどんなとき、どのように行っているか」の質問で、児童理解を主に「授業中の観察、机間指導などを通して行う」「休み時間に、児童の過ごす様子を観察する」という方法だけで行っている教員は全体(25名)の中で44%(11名)であった。

一方、授業や休み時間だけでなく、自由記述から「とにかく、いろいろな機会にかかわりをもつようにする」「他の教員から情報をきく」「児童の好きなこと、頑張っていることについて話す」など、様々な機会に児童理解を行っている教員は、全体の中で56%(14名)だった。

前述の授業と休み時間だけで児童理解を行っている教員の中で、「児童の考えや思い、児童が何を必要としているか分からない」と回答した教員は、64%(7名)で、様々な機会に児童理解を行っている教員の36%(5名)に比べて高かった(図2)。

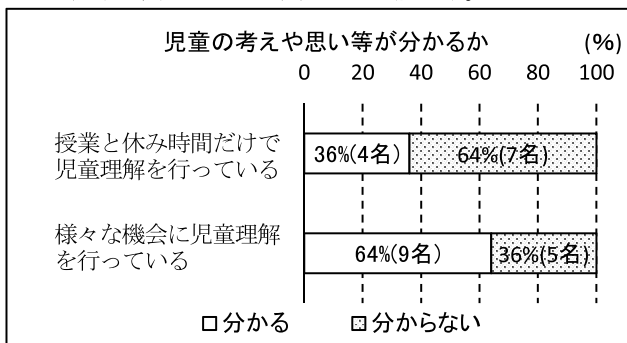


図2 教員向け児童理解アンケート

以上の結果から、児童の考えや思い、何を必要としているかを知るためには、他の教員と児童について話したり、授業や休み時間以外にもあらゆる機会に児童とかかわりをもったりするとよいことが分かる。児童を理解する上で、教員が児童の好きなこと、頑張っていることなどを知ることが大切であると考え、学年会で提案した。

イ 児童へのアンケート結果と手立て

「学校に行きたくないことがあるか」の質問で、「ある」と答えた児童の割合は、全体で51%であった。一つの学級(以下、対象学級)では74%であり、全体と比べて高い傾向が見られた。学校に行きたくないことが「ある」と答えた児童の中で、「どんな学校になれば、行きたくなるか」の質問において、選択肢から「先生にほめられる」を選んだ児童が、全体では49%、対象学級では68%、「先生や友達に自分の得意なことを見せられる」を選んだ児童は全体では28%、対象学級では36%であった。対象学級では、他者とかかわりを通して認められたいと思っている児童が多いのではないかと考える。

「児童生徒への適切な指導のために～一人一人を認める～」(栃木県総合教育センター2019)によると、児童によっては、先生から認められていないと感じて

いる可能性があり、「『承認する』こと」と「『関心を示す』こと」が大切であると述べられている。

これらのことから、特に不登校の予兆が見られる児童に向けて、教員がその児童の得意なことをほめたり、認めたりするなどの支援を実施することを提案した。また、児童同士が好きなこと、得意なことを認め合うことで、互いにかかわり合えるような取組も実施していくこととした。

(2) 学年会における取組

ア 対象児童(A児、B児)について

対象学級の中から2名(A児、B児)を対象とした。A児は、明るく、はきはきと意見を発表する様子が見られた。B児は物静かで、発表の際などの声が小さく、担任にあまり話し掛けることはない。しかし、それぞれ図3のような不登校の予兆が11月初旬から見られたため、学年会で支援を検討することとした。

A児
・給食や集会行事の前に体調不良(気持ちが悪い)を訴えることが増えた。 ・体調不良により、早退することが増えた。 ・トイレに行く回数が増えた。 ・Q-Uで「学校に行きたくないことがあるか」の質問に「少しそう思う」と回答した。 ・アンケートで「学校に行きたくないことがときどきある」と回答した。
B児
・月曜日や長期休業明けに欠席をすることが多い。 ・困ったことがあると泣き出してしまう。 ・元気がない日が増えた。 ・Q-Uで「学校に行きたくないことがあるか」の質問に「とてもそう思う」と回答した。 ・アンケートで「学校に行きたくないことがよくある」と回答した。

図3 対象児童における不登校の予兆

イ 支援シートの活用

「～なのではないか」の視点により児童理解を行い、それを基にした支援を検討することができる支援シートを作成し、提案した。支援シートには、不登校の予兆だけでなく、児童の「うまくいっているところ」「好きなこと、得意なこと」などを書き込めるようにし、支援を検討する際の手掛かりとした。また、不登校の予兆に関する背景や要因、児童の願いなどについて考え、それを基にした支援目標、だれが、いつ、どのようにするかなどの具体策を検討できるようにした。振り返りの際に、毎回児童の支援の状況を確認し、新たな情報を追加したり、具体策を見直したりできるようにした。このシートは、ドロップダウンで入力内容を選択したり、校内共有サーバーでどの教員も閲覧、加筆したりできるよう工夫をし、学年会で活用するようにした。

ウ 対象児童についての支援の検討

学年会の前に、担任は児童の「うまくいっているところ」「好きなこと、得意なこと」などを支援シートに入力した。そして、話し合いの中で学年の教員も付け

足すようにした。それらの情報から、不登校の予兆の背景や要因、児童の思いや願いなどについて、「～なのではないか」の視点で考えを出し合った。初めは、不登校の予兆の要因が家庭にあると考えてしまうことがあったが、うまくいっているところ、好きなこと、得意なことなどに着目し、考えを出し合うようにした。「ほめられると気持ちが持ち直すのではないか(A児)」「友達に認められたいのではないか(B児)」などの意見が出された。担任は、「自分では思いつかなかった視点をいただくことができた」と理解が深まった様子だった。その後、話し合ったことを基に支援目標を立て、A児は「手伝いができる」「ほめられると意欲的に取り組む」というところに着目して目標を設定した。B児も同様に「友達と遊ぶのが好き」というところに着目し、目標を設定した。さらに、目標から具体策を検討し、担任だけでなく、学年の教員、支援員などそれぞれが対象児童にかかわるようにし、翌日から実践した。

2週間程度、支援を継続しながら、毎週の学年会で支援の状況を確認した。その中で、対象児童への理解がより深まったり、具体策を再検討したりする場面が見られた。B児については、担任が児童の好きなゲームを話題にして話をする、好きなことが同じ友達と席を近くするなどの具体策が追加され、経過を観察していくこととなった(図4、図5)。

	A児
うまくいっているところ	・先生と積極的に話し、交流できる。 ・自分から挨拶できる。 ・友達を手伝ったり、励ましたりできる。 ・ほめられたり、認められたりすると後の活動などに意欲的に取り組む。
好きなこと 得意なこと	・家族(特に母親)が好き。小動物が好き。 ・キャスターボードが得意。
「～なのではないか」の視点	・お母さんに、甘えたいのではないか。 ・給食で苦手の食べ物を食べなくてとはプレッシャーを感じているのではないか。 ・活躍したことをほめられると、気持ちが持ち直すのではないか。
目標	・給食当番の仕事などに進んで取り組み、学級の力になることができる。
具体策	・様々な場面で、意図的に役割を与え、かかわる機会をつくってほめる。(担任) ・A児が友達を手伝ったときにほめる。(支援員) ・学年体育の時間にA児が準備や片付けを頑張っている姿を認め、ほめる。(学年の教員)

図4 A児についての支援の検討

	B児
うまくいっているところ	・友達と仲良く遊ぶことができる。 ・係活動をきちんと取り組む。 ・ほめられたり、認められたりすると後の活動などに意欲的に取り組む。
好きなこと 得意なこと	・友達と遊ぶことが好き。 ・漢字が好き。漢字を丁寧に書ける。
「～なのではないか」の視点	・自分から先生に助けを求めることができないのではないか。 ・先生と話したいけれど、話し掛けることができないのではないか。 ・先生や友達ともっとかかわりをもったり、認められたいのではないか。
目標	・好きなこと、得意なことを生かし友達と話すことができる。
具体策	・好きなこと、得意なことについて教員や友達と話す機会をつくる。(担任) ・学年体育の時間などに役割や用事などを与えたり、頑張りを認めたりし、児童にかかわる。(学年の教員) ・好きなこと、得意なことが共通する友達と、座席を近くしたり、グループを組ませたりし、友達とのかかわりをつくる。(担任)

図5 B児についての支援の検討

児童の様子により、新たな視点から支援を検討する必要がある場合には、支援目標や具体策を再検討した。児童の変容についても振り返りに記入し、次年度に引き継ぐこととした。

(3) 児童の好きなこと、得意なことなどを認める場の設定

対象児童2名が、うまくいっているところの中に「ほめられたり、認められたりすると後の活動などに意欲的に取り組む」という姿が見られたことから、好きなこと、得意なことなどを教員や友達から認められる場を設定することについて、学年会で話し合った。そして、対象児童を中心としながらも、全ての児童を対象とし各学級で好きなこと、得意なことなどを発表する授業(以下、発表会)を実施した。

発表会では、児童が好んで取り組んでいること、得意なこと、第1学年になってできるようになったことなどを発表した。緊張した様子だったが、多くの児童が笑顔になっていた。後日、担任は、好きなことが同じ児童同士でグループになるように、座席を配慮したり、発表の資料を掲示したりした。児童は、休み時間などにその掲示物を見て、友達と発表会について振り返ったり、笑顔で話したりしていた。

(4) 児童の変容

ア 対象児童(A児、B児)について

対象児童2名は、実践後のアンケートで「もっと先生と好きなことの話をしたい」「もっと先生や友達に

得意なことを見せたい」と答えていた。さらに、対象児童にそれぞれ次のような変容が見られた。

A児は、給食当番の仕事で、重い食器を運んでいた際などに担任にほめられたり、学年の教員から「がんばっているね」と声を掛けられたりしたことで、明るい表情になることが多くなった。担任に「前より少し学校に行きたくなる日が増えた」と話しており、給食や集会の前に体調不良を訴えることや早退も減少した。発表会では、家で練習し乗れるようになったキャスターボードについて発表した。担任や友達から「あんな難しそうなボードに乗れるなんてすごい」と声を掛けられ、とてもうれしそうにしていた。また、「先生や友達に得意なことを紹介できたときは楽しかった」「みんなに知ってもらえてうれしかった」と話していた。発表会を通じて以前よりも元気に学校生活を送る様子が増えた。給食当番を頑張ったことや発表会で発表したことを認められたり、ほめられたりしたことで、うれしい、楽しいと感じた経験が積まれたものと考ええる。

B児は、担任と好きなことについて話すようになり、以前よりも担任に話し掛けることが増えた。また、授業中に仕上げたプリントや作品などを、生き生きとした表情で見せることが多くなり、「先生と好きなことの話ができるのはうれしい」と話していた。発表会では、書けるようになった漢字について発表し、「自分の得意なことを友達に発表できたことはうれしかった」「これからも得意なことを見せたい」と話していた。プリントやドリルに何度も漢字を練習し、うれしそうに担任に見せることが増えた。また、好きなことが同じ友達と休み時間に楽しそうに話す姿が以前より多く見られようになった。発表会を通して、自分の好きなこと、できるようになったことについて教員や友達と話す楽しさに気付いた様子だった。

イ 学年全体の実践後アンケート結果と考察

実践後に第1学年全体にアンケート調査を行ったところ、学校に行きたくないことがあるかの質問に、「ない」と答えた児童は56%であり、実践前の49%から増加した。「どんな学校になれば行きたくなるか」の質問では「もっと先生にほめられる」と答えた児童は減少し、「もっと先生や友達に得意なことを見せられる」と答えた児童が増加していた(図6)。

学校に行きたくないことがあるか	実践前	実践後
「ない」と答えた児童	49%	56%
どんな学校になれば行きたくなるか	実践前	実践後
「もっと先生にほめられる」と答えた児童	49%	45%
「もっと先生や友達に得意なことを見せられる」と答えた児童	28%	63%

図6 学年全体の事後アンケート結果

この結果は、学年全体の教員が意識して児童の思いを考えながら話すなどの関心を示すかわりをしたり、得意なことをほめるなどの承認するかわりをしたりしたことで、対象児童を中心としながらも、多くの児童に認められたという思いが満たされたことによるものと考ええる。そして、各学級で児童の好きなこと、得意なことを認める場を設定したことが、認められるよさを感じ、「もっと他の人に得意なことを見せたい」という児童の増加につながったものと考ええる。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

学年会で、不登校の予兆が見られる児童について「～なのではないか」の視点で話し合ったことにより、様々な視点で理解することができた。それらを基に、教員が関心を示したり、承認したりすることにより、不登校の予兆が見られる児童へ適切な支援を行うことができたものと考ええる。指導・支援する上では、思いや願い、何を必要としているかなど児童の視点から考え、認めるかわりをしていくことが必要であると考ええる。

また、児童が得意なことについて教員にほめられたり、好きなことが同じ友達と話ができたりしたことが、学校に行きたいという思いにつながった。このことから、好きなこと、得意なことなどをきっかけに、他者とかかわり、他者から認められる経験を積んでいくことが重要であると考ええる。学校に行きたいという思いにつながる取組を学年会等で検討し、実践、振り返り、見直しを行うサイクルを確実に進めるようにしていくことが大切である。

2 課題

学年会で、児童への支援を話し合った際に、家庭における背景や要因に意識が向きすぎてしまうことがあった。学年会やケース会議などで、支援シートを生かしながら、児童の思いを大切にし、学校で取り組める支援に目を向ける必要がある。

また、児童同士が授業以外の場面でかかわったり、認め合ったりすることができるように、支援を検討していく必要がある。そのための具体的な手立てについて、さらに考えていきたい。

〈主な参考・引用文献等〉

- 石隈利紀・田村節子(2003)『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門』図書文化社
- 日吉仁(2010)「不登校の子を受け持ったら」他『楽しい授業9月号』 仮説社
- 栃木県総合教育センター(2016)「児童生徒への適切な指導のために～かわりの基本～」
- 栃木県総合教育センター(2018)「欠席が気になる児童生徒への指導のヒント～不登校の初期対応～」
- 栃木県総合教育センター(2019)「児童生徒への適切な指導のために～一人一人を認める～」
- 栃木県総合教育センター(2020)「児童生徒への適切な指導のために～子ども理解を深める～」
- 文部科学省(2022)「生徒指導提要」